

各地で田植え体験

「楽しい思い出になった」

ど、楽しかった」と笑顔を見せた。

県内のJAや地域グループは、子どもたちや一般消費者を対象に、田植え体験を行っている。米の消費量が毎年8万トずつ減少している中、食と農に対する理解を深めてもらい、米の消費拡大を図ることや、JAのファンになっってもらうことが目的だ。各JAや地域グループの取り組みを紹介する。

JAうつのみや

【うつのみや】JAうつのみやはこのほど、宇都宮市上欠町の田んぼでアグリスクール「田植え体験」を開き、親子14組51人が参加した。とちぎ青少年センターによる「子どもわくわく体験教室」も開かれ、JA、姿川地区環境保全会、とちぎ青少年センターの3団体共催で田植えを実施。全体で119人が特別栽培米「コシヒカリ」の苗を植えた。

アグリスクールは、JAが地域住民を対象にくらしの活動の一環として実施。2017年度で活動6年目に入った。

体験では、JA西部管農経済センターの田口正美センター長が苗の植え方を説明。参加者は目印のひもに沿って泥の感触を楽しみながら親子で苗を丁寧に植えていった。

地元生産者の松本富男さん(52)が、子どもたち



田植えをする親子 (JAうつのみや)

ちを田植え機に乗せ試験体験を行った。

環境保全会の鈴木康男さん(66)と松本さんは、田植えを終えた後の祝い行事のさなぶりを体験してもらったため、2人が栽培したもち米を使った赤飯を振る舞った。

アグリスクールに親子

3人で参加した阿久津龍子さん(43)は「普段食べている米がどのように育つのかを、子どもに知ってもらいたくて参加した。苗の成長が楽しみ」と話し、娘の杏さん(7)と息子の仁君(7)は「苗を立てるように手を苗を植えるのは難しかったけ